

幼生

machiaki

それはいきなりそこにあった。落ちているのか置かれているのか、はじめからそこにあったのか。

誰にも触れられたことのない肌のように滑らかに、私を拒みながら誘っていた。

なぜ誰も気づかないのだろう。こんなものを見つけたなら、警察に連絡してしかるべきだろうに。面倒ごとに巻き込まれたくない人々に無視され続けてきたのか、あまりにも意外すぎて注意を払われなかったのか。

それとも、と私は考えた。

それとも、私を待っていたのではないだろうか。

拾い上げてみると、手にずしりと重い。そして、真夏に似つかわしくない冷たさだった。金属特有の密度の高さが心地よい。みっちり詰まった冷たい重み。

そう、これは人を殺す。

こんなに小さくても簡単に殺す。

ともかく私はその、黒く重くひんやりしたものを拾い上げ、無理やりバッグの中に押し込んだ。

最初、先に入っていた財布や文庫本が不平をこめてそれを押し戻そうとしたが、それは意外に器用に、隙間にずりりと滑り込んでいった。

マンションの部屋に戻ると、少し迷ったが鍵をかけ、結局チェーンまでかけた。

部屋の中は汚かった。楽しい散らかりようというのではなく、部屋の主のだらしなさや展望のなさやを如実に示したもので、だから私はこの部屋を好きになることができない。

万が一と思って開いてみた携帯電話には迷惑メールすらも届いていなかった。

いよいよ、と私は思った。

いよいよこの世を去るチャンスが来た。

撃鉄を起し、引き鉄を引くことさえできれば、私はいよいよ旅立つことができる。

飛び降りも飛び込みも嫌だった。首吊りもリストカットも気が進まない。毒薬か拳銃がいいのではないかと考えていたが、それは単に両者とも手に入れることが難しいために行方を先延ばしできるという迷いだったかもしれない。

だが幸か不幸か、今その手段を私は手にしている。

これを私でない、ほかの誰かに向けることもできる。私でなく相手を殺すこともできる。私はすでにあの人に殺されかけていて、私もあの人に同じことを仕返している。

たとえばこの携帯電話を沈黙させることによって、あの人は私の何パーセントかを確実に殺している。

私はその沈黙に沈黙で答えることで、あの人と私とを同時に少し殺している。

私があの人に別れを告げることで、私があの人と私自身と、どちらをより多く殺すのだろうか？

答えはあまりにも簡単で、私はそれを思うたびに口惜しく空しくなり、またいくらか自分を殺していく。

そんなふうに、少しずつ砂像がほどけていくように死ぬよりも、発破をかけられたビルの如くに一瞬で爆失したほうがいっそ良いかもしれない。

そのための道具は今ここに、この手の中にある。

私の恋は不毛だった。

恋とか愛とか考えるのも億劫になる頃になってようやく、互いに思い合っているらしい男と出会ったが、男には妻子があった。

相手は自分の家庭を捨てるつもりはないようだったが、私も相手と所帯を持ちたいわけではない。特別に裕福なわけでもなく、見目が良いわけでもないが、単になんとなしに心の隙間に滑り込んできた男だ。その隙間はずっと以前から認識されていたものだけれど、一度満たされてしまうと、もう一度空っぽにする時には予想外の苦痛をもたらす。

ともかく相手にとっては、生活のにおいがなく自由を表している何かであればそれでよかったのだろう。あるいは、倦怠期の人恋しさだったのかもしれない。いずれにしても、いつかは去っていく人間だった。

銃をこめかみに押し当てて目を閉じてみた。

ゴツン、と銃口を当てた衝撃が頭蓋骨に響き渡る。ぐりぐりと押し付けてみれば、耳の近くで髪のコすれる音がざりざりとノイズを起こす。

私の心はここにあるのだろうか？

思い直して、今度は銃口を胸に当てた。中央よりやや左、ぞっとするような硬質の冷たさが服を通り抜けてくる。

動かさずにぴたりと留めておく。

心臓は恐れ気もなく打ち続ける。忙しすぎて、皮の向こうで起こっていることになどかまっていられないといわんばかりに、無関心に打ち続ける。

私の心はここだろうか。

どうせなら、心を粉みじんにするやり方でこの世界から消え去りたい。

このぐらい物質的な、ずしりと現実感を備えた武器なら、心というものを物理的に破壊することはできるのだろうか。愛や憎しみ、空しさや喜びを、バラバラに、木っ端みじんに吹き飛ばすことができるだろうか。

人さし指がこわばっていて、不自然に震えているのに気づく。

胸が痛い。

もう撃ったのだったっけ？

そのとき、目の端で何かがキラキラと輝いた。

淡くこぼれだした光はまた小さくなっていく。

私は銃をテーブルの上におろし、かわりに携帯電話を手を取った。

優しい、誰も傷つけそうもない均一の丸っこい字が並んでいる。

画面と文字色のコントラストに少し目を細め、内容を追いかける。

『もう一度会いたい』

すべてを要約したような一文だった。

会ってどうしようとか、これまではどうだったとか、これからどうなるのかとか。そんなわずらわしい一切を含んでいるようで実は何も担っていない。

何か返信しようと思ったが、そう思って眺めているうちに液晶のライトが落ち、画面が辺りの暗さに溶けて字が読めなくなった。

私は携帯を再びテーブルの上にそっと置いた。

どうせ返信してしまうだろう。無視することもつっぱねることもできないだろう。

そうやって生きてきたけれど、もう終わる。

もう一度銃に目を戻す。

文庫本やマニキュアの瓶、ペン、空のCDケースに取り巻かれ、偶然真空になったような場所に、黒光りする体を横たえている。

いつでも逝ける、と思ったら急に喉の渴きを覚えた。

冷蔵庫を開けてみたが中にはしなびたキャベツと半分ぐらい埋まった卵のパックが入っているだけで、ほかには食料も飲料もない。仕方なく蛇口をひねりコップに水を汲んで、生温かさを感じないで済むように鼻からの呼吸を止めてぐびりと飲み込む。

何度洗ってもどこか薄汚れたままのグラスを流しに置き、銃の所まで戻ってみて私は思わず目を見張った。

銃口から、鮮やかな緑に黄色の紋がよく映える芋虫が、のっそりと這い出してこようとしていた。

銃口から出てきたのではなく、本当ははじめから部屋を這っていた虫なのかもしれない。そのほうが理にかなっている。が、いずれにしてもバランスの崩れた光景だった。

一目見て何齢かということまではわからないが、もうかなり大きくなっている。もう少しすれば蛹（さなぎ）になるだろう。十分太っており、這う様子もふてぶてしいほどにゆったりとしている。現実離れた鮮やかな色彩で、銃身を這っている。

まさか食料と思ったわけでもあるまい。身を隠そうとしているわけでもあるまい。

見ていると、彼は縁側に落ちた陽だまりの特等席を見つけた猫のように、銃の上で長く寝そべったきり動かなくなった。

私が拾ってきた銃に対する所有権を主張しているかのようなその態度に、私はえもいえぬ苛立ちを覚えた。

芋虫を握りつぶさぬように銃を掴み、思い切り振り下ろす。そのアクションの途中になってようやく暴発の危険性が頭をよぎったが、幸い何も起こらず、かわりにベリリと剥がれるような感触を私の何か抽象的なものを感じる器官が捉え、直後にべたりと畳に何かが張りつくような音がした。

すっかり退色しわずかの香りも残っていない畳の上に、芋虫は見事に着地していた。

私は畳の上に散らばっていたものをおざなりにどけて、その場に膝をついた。

土下座をするような格好で、芋虫にそうっと顔を近づける。

芋虫は「深く傷ついた」とでも言いたげにぎゅっと身をすくめていたが、ぶるりと震えるとやがてまたその節々を弛緩させ始めた。

芋虫は私の目の前でゆっくりと体を伸ばしてゆく。美しいともグロテスクともつかない。

こんなにも小さな生物が、同時に体の様々の部分を動かすことができるのが不思議だった。

何対あるのか知らないが、短い脚を畳の目に慎重に絡ませながら、彼は私のほうへ顔を向けて進んでくる。

私は土下座している。

彼は昂然と顔を上げて向かってくる。

私は銃を取って銃口を彼に向けた。

彼は怯えた様子もなく足を進める。どうせ撃つ勇気などないと思っているのだろう。

私は警告もなく引き鉄を引いた。

銃とはいったい何のためにあるのだろう。

敵を退けるためにあるのか。自分の身を守るためにあるのか。夫を、妻を、恋人を、子どもを、守るためにあるのか。恋人の妻を、子どもを、あるいは自分を殺害するためにあるのか。

そのいずれかであったとして、美しいが無力な芋虫をずたずたにするためのものであってならない理由もあるまい、と思った。

携帯電話が鳴る。メールの着信。

私は身を起こしてテーブルまで行き、メールを開く。

『返事をしてくれ。心配している』

私、今、芋虫を撃った。

バラバラに引きちぎれて、緑色の欠片が部屋中にぶっ飛んだの。

きらきら何か撒き散らしながら、部屋中を輝かせながら。

世界が緑色になったようだった。

緑色の夢を見た。

夢の中で私は自分に向けて銃を撃った。

じわじわと胸から何か流れ始めた。血かと思ったが、その液体は緑がかっていて、よく見ると私の胸からではなく銃口からあふれ出てきていた。重力に引っ張られて染みがだらしなく下方へと垂れて広がっていく。

ひんやりとした清々しさがあればまだ救われるけれど、液体は生温かい。

だらだらと胸元から腹まで伝い、もっとずっと下まで落ちていって、足元に滴り落ちて水溜りが大きくなっていく。

水溜りを見下ろしてみても表面は何も映していない。それでも、どうしてもそこから何かが出してくるはずだという思いにとりつかれ、私はひざまずいた。

下に溜まった液体に触れた膝が、ジッと焼けるような音を立てる。

ぼたり、と背後に何か重たく粘度の高いものが落下してきた音。見上げると、天井は透き通るような緑色。

いや、実際に透けている。外が見える。上に見えるはずのない、外の景色が見える。葉、空、屋根、人、何色かわからない花。

薄緑のフィルタの向こうで、いつか幼いときに見たアトラクションの書割のような、妙に均質な色をしていた。

そうこうしている間に部屋が溶けていく。

異臭。

胸がヒリヒリする。

よく見てみると、胸元の肌が真っ赤にただれている。

服の裾にもぷすぷすと穴が開き始める。

手に持っていたはずの銃はいつのまにか足元に転がっていて、それでもまだずるずると液体を吐き出し続けている。

足がじんじんする。

その痛みも遠くなっていく。

見ると、足から少しずつ溶けている。足元から温められた氷像みたいに。逆さから見たろうそくのように。

私は自分が異臭を放つ液体であることを少しずつ実感して、それからため息を吐き出した。

まぶたを閉じる。



だが、光がまぶたを叩く。

私はゆっくりと目を開いた。

翌朝目覚めると、壁や畳や、そこら中に散っていたはずの緑色の染みはすべて消えうせていた。

正確に言うと、きらきらした体液のあとはどこにもないが、それらがあつたはずの場所には小さな蛹（さなぎ）が留まっていた。薄汚れたオフホワイトの壁、褪せた畳、何年経っても深みの出ようのないつるりとしたライトブラウンの家具。それらに、摺り硝子のような硬質さと、触れればやんわりと指を押し返してきそうな柔らかな弱さとを同時に感じさせる蛹が危うく引っかかっていた。

そして畳の上には、あいかわらず黒々と、現実的な重みを備えた銃が横たわっていて、その銃身にも翠色のいびつな宝石がひとつ、鈍く輝いている。

私は蛹たちを踏み潰さないように足を進め、カーテンを開けた。

外は晴れでもなく雨でもない。

窓から見える風景は美しくも醜くもない。ただ閉じている。

カーテンをもう一度引き合わせ、服を脱ぎ捨てる。

ブラジャー、キャミソール、シャツ。ストッキング、スカート。

洗顔。鏡に映る顔はくすみ、ゆがんでいて、思わず目を背けた。

朝食はとらない。食欲がない。

携帯電話がメール着信があつたことを示す緑色のシグナルが、一定の間隔でちらちらと光っている。

私は携帯を開かぬまま、一連の身支度を整えた。

のっぺりとした顔にのっぺりと化粧をほどこし、申し訳程度のシャドウとチーク、朝つけたら塗りなおさないルージュ。

出かける顔になればドアを抜けて出ていくだけだ。

そして時間になれば帰ってきて、朝取った行動をほどいていくだけ。

ただこれからは、私の部屋には蛹がいて、蝶になる日を夢見ている。

蛹は日に日に硬くなっていくように見えた。

自分が留まる壁や家具や銃に色を合わせることなく、美しい緑色を保っている。

私は帰宅するたびにうっとりと彼らを眺めたが、ある日ドアを開けたとき、ぼんやりとした視界をふらふらと何物かが横切っていった。

ああ、と私は嘆息した。

部屋の中を、何匹もの蝶がひらひらと舞っている。あるものはレモンの黄、あるものは夕焼けの橙、あるものはトルコ石の青、紫水晶、輝くような白。

あの、黄色の紋を持った緑色の芋虫は、今や好き勝手な色をしてそこいらを飛び回っている。

私は少し息苦しさを感じ、窓を開けようとした。

足元の銃に目をやると、その蛹だけは羽化せぬまま残っている。

カーテンを開く。

窓のサッシに手をかけて、迷った。

ここを開ければ蝶は出て行ってしまいうだろう。きっと出て行くだろう。

私は思いとどまり、その夜は蝶たちと過ごした。

蝶はおとなしかった。時折、私の肩や指に止まりさえした。

その細い脚の頼りない感触が、私を泣きたい気分にした。

翌朝、私は窓を開けた。

蝶たちは、はじめこそ朝陽の明るさに戸惑っているようにも見えたが、やがて一匹、また一匹とふわりと寝床を蹴って飛び上がり、ゆるゆるとアーチを描くようにして外へ出て行った。

ゆるりゆるり、ひらひらと、ほんの数瞬だけ現れてすぐに消えていく虹を架け、皆いなくなった。

いや、ただ一匹だけ、まだ羽化もしていない蛹（さなぎ）を残して。

銃の所まで戻ると、そこに残された蛹をそっと指でつまみ上げ、ベッドの脇の小さな台の上に置いた。

私は彼を銃で狙い、撃つと宣言して脅したが、蛹はびくりとも動かない。

彼からの反応を諦めて携帯電話を取り、久しぶりにあの人にメールを送った。

さよなら。死ぬわ。記録は消しておくから、返信しないで。

それから蛹の隣に腰掛け、しばらくぼんやりと窓の外を眺めて待った。

結局一晩待った。

その夜の夢の中で、私は蛹を撃った。

すると、びしり、と音を立てて蛹の背中が割れた。

翌朝目覚めて、携帯電話を探したが、そこにメール着信を知らせるシグナルはなかった。

すべてが空っぽになった気がした。

隣の台の上にいる蛹の背には、ひびが入っている。そうっと覗き込んでみたが、中には何もいない。

私は広くもない部屋をぐるりと見渡した。

すると、影の中から黒い蝶がすうっと現れて、よたよたと羽ばたいてくると、私の膝にすがりつくように止まった。

私は彼を膝にとどめたまま、窓まで行って開けた。

しばらく待ったけれど、蝶は動かない。

蛹でいる時間が長すぎたのだろうか。出てくる前に死に近づきすぎたのかもしれない。

だが、私もこのままではいけない。

蝶を両手で包み込むと、手首から先だけ窓の外へ差し出した。

この蝶は、出て行けるのだろうか。

出て、生きていけるのだろうか。

ここでこの手を離すのは、蝶にとって残酷な仕打ちかもしれない。送り出したくない。いつまでもここにいたっていい。どうせいつかここで死ぬのだから、そのときに放してやってもいい。

どうせ死ぬのだ。今放さなくても、死んでから埋めればいい。

手を戻そうとしたとき、手の中で蝶が抗議するかのようにバタバタとぶつかってきた。

その思いがけない強い力に、私はぞっとした。

そう……もう彼は、死んでいるのだ。

私はゆっくりと手を開いた。

黒い蝶はしばらくだけ掌に留まっていたが、大きな羽根をぴんと伸ばし、前を見据えて飛び立っていった。

了